

「HSK 季刊わたぼうし」 第65号

発行者:わたぼうし連絡会

発行日:2005年(平成17年) 1月8日 '05冬号

第65号の特集

「自立生活支援センター富山」主催

宮城県知事・浅野 史郎氏講演会 I

飼い犬の 鎖の長さにある自由

比呂雪



この機関紙は障害のある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

「自立生活支援センター富山」主催
宮城県知事・浅野 史郎氏 講演会 I
＝テーマ：脱施設の施策と実践＝

期 日：2004年 8月 6日（金）

場 所：富山CICいきいきKAN 5階多目的ホール

講 師：宮城県知事・浅野 史郎氏

※お断り：今回、「HSK季刊わたぼうし」の紙面に掲載できなかった講演の部分も、ホームページに掲載させていただきました。

あいさつ

皆さん、こんにちは。宮城県知事浅野史郎56才でございます。私の半生を浅木さんから38秒で。言われてみるとあれしかないんだね。アッという間の半生でした。56年間生きて来ました。真っ黒な顔をしていますよね。私ね。昨日東京で12キロ、今朝は福岡で11キロ、明日はこの富山でたぶん10数キロ走る。毎日、走っていますから。金がかからないのですよ、この趣味は。「ランニングコストゼロ」と言っているのですけれども。特に夏の間はですね、こういう顔になるのは仕方がないと思いつつ楽しく走っています。



皆さん暑い中、本当にご苦労さんです。明日からですか。富山祭りも始まるという楽しい時にこんなに集まっていたいただいてありがとうございます。ここはまたライトで我慢大会やってくらいに暑いのでチョット脱ぎますから。

今日はこういう表題をいただきました。「脱施設の政策について」ということですがけれども。あの、別に宮城県大したことをやっていないんです。富山の方が大したことをやっている人が、いっぱいいるんですから。だから、そういう自慢話にはならないと思えますけれども。

今日はどちらかというところですね。ずいぶん時間たっぷりいただきました。なんか7時45分から質問コーナーとかというのですけれども。ちょっとそこまで私体力持たないじゃないかと。今日も炎天下で11キロ走りましたので、しつこいようですが。7時半ぐらいで、たぶんバツタリいきますので。そこで「ご質問は？」ということにすることになるかも知れませんし。調子に乗ればやりますから、ナンボだって。今日は9時50分ぐらいまでやってみたいと思えますけれど、会場の都合でダメだということから7時半でやめます。8時にはここを明け渡すことになります。

昨日はですね。福岡にいたのです。福岡の宗像市というところにある「グローバルアリーナ」というところにいたのです。何でいたかというところ、そこで高校生、全国の高校生、180人集めた第一回の次世代リーダー養成塾というのがあったのです。うたい文句で書いてあるのは「政界・財界・文化人・そうそうたる講師陣」というふうなうたい文句としてあるのですね。私も講師の一人でございます。私も「そうそうたる講師陣の一人」で光

栄の至りでございますけれども。

昨日、そこで1時間半ぐらい時間もらって講師を務めたのですが、最初に用意した私の講演のタイトルはですね、「私の英語学習術 エルヴィスとの出会い」というのです。私はエルヴィス・プレスリーのファンというのは知っている人は知っているのです。ここでも2～3人ぐらい知っていると思いますけれども。

もう6年間ですね。地元のコミュニティFMで「史郎と夢トーク」という番組をやっているのです。浅野史郎と素人をかけていますが「史郎と夢トーク」という番組を毎週水曜日の夜7時から7時半までやっているのですが、もう250回ぐらいやっています。これは世にも珍しい番組で、エルビス・プレスリーの曲しかかけないのですね。エルヴィス・プレスリーの曲の話しかしないのです。政治の話とか、県政の話は一切しない。

ということで、エルヴィス・プレスリーに中学校3年生の時に会って、「出会って」と言っても、別に会ったわけでもないのですよ。曲として出会って、そこで私の人生が変わった。曲目が「夢の渚」という「フォローアップドリーム」という曲なのですが、その辺からちょっと話を起こして、いかに自分が英語を勉強して、ちょっとさっきも紹介があったように留学をしたりアメリカ大使館に勤務することになって、そこで人生変わったんだ。それが1分36秒の「夢の渚」という歌から始まったんだということを話そうと思ったの。その高校生たちに。

そしたらですね。ちょっと事前に聞いたら「この高校生たちはただ者じゃない」ということを聞いたのです。2週間その宗像のグローバルアリーナに合宿してね、やるんです。実はこれ富山県はメンバーになっていないのですけれども、地方分権研究会という7府県の知事の集まりがあって、それがメンバー県になっています。

宮城県から10人、和歌山県から10人、佐賀県から10人と7県ですね。地元福岡県から20人、その他に全国枠で100人、全国31都道府県から次世代リーダーたらんという高校生が集まってきてやった養成塾なのですけれど。どんなふうな講義の風景かといったら「ただもんじゃありませんよ。浅野さん。」と言われました。

マハティール、マレーシアの前の首相、彼も私の前に、大分前に講演をしたのですけれども、質問をですね、その高校生が英語でするのです。とうとうと自説を述べるのです。そしてマハティールさんに、しかも英語で「マハティールさん、私たちを見て日本の未来は明るいと思いませんか？」というようなことを言うのです。

さすがにマハティールさんは「あなたがたの顔を見ただけではわかりません。」というように答えたいですけれども。そういう高校生です。それから誰かの授業で「はい、私は将来総理大臣になりたいと思ってここに来ました。」「ああそうか。あんたの髪型小泉さんに似ているな」とか言われて。と言いながらですね。今日は何人でしょうかね。今日はここに250人ぐらいいらっしゃいますか。180人ですけれども、「質問は？」私のときも「質問？」と言ったら、30人ぐらいパッと手を挙げました。すごい高度な質問をですよ。私も講演してあんなに高度な質問をパッと受けたことはありませんでした。非常に満足でしたけれども、それは後からの話。

だからですね。「私の英語学習術」しかも英語をペラペラってしゃべる学生を相手ですよ。そこで英語で質問されたら私どうしたらいいだろうかと。「おじさんをバカにするもんじゃありません」という答えにしようと思ったのですけれども。そういうようなことで、

実は急遽、羽田にちょっといたのですが羽田空港で新しくレジュメを作って「私と障害者との出会い」というのを付け加えたのです。1時間半のうち後半はその本題で話すことにしたので、昨日話してきたばかりのことを、今日もう一回、ここで再現をします。ということですが。

結果的にいうと高校生に難しいかなと思ったけれど、それだけ非常に意識の高い高校生だった。障害者問題はほとんど考えたことのない子供たちです。しかし質問の内容を聞いてもですね。ああ本当に真剣に聞いてくれたんだなということが分かって私としても大変うれしく思いました。

障害者問題って何だろうか？

そこで、その話をちょっとしながらですね、今日の「脱施設の政策と実践」ということにつないでいきたいと思います。というのは別に「宮城県でこんな施策をやっています。どんなものだい。」って言うてもしょうがないのね。これ。やはり今主催者からもお話があったように、これは社会にとっての、我々一人一人にとっての、障害に関わっている人も関わらない人も、社会を構成するすべての人にとって、障害者問題って何なんだろうかというか、もっと言えば「人間観」みたいなものですね。人間というのはいったい何のために生きているのだろうか。少し大げさに言えば。そういうようなことから説き起こしていくべきではないか。ということで、私、浅野史郎の人生でたどってきた「障害者問題との出会い」そして今日ここに至っているというようなことを、高校生を相手にお話ししたような感じでここで再現したいと思います。

障害者問題との出会い

一番最初ですね。私のこの問題に本当に真剣に出会いとしてあったのは1970年です。昭和45年、その年、さっき経歴でありましたけれども、私は厚生省という役所に入りました。大学を卒業して、そのときにですね。16人、いわゆる事務のキャリアという仲間がいました。16人。その16人と一緒に1ヶ月間厚生省で研修を受けたのですね。こういう座学というものもありました。講義を受けるというものもありましたけれども、いろんな所に視察に行きました。

その一つに重症心身障害児施設に行ったのですね。嶋田療育園か安芸津療育園かどっちだったか覚えていないくらいですけども。そこで私は生まれて初めて重症心身障害児という人に出会いました。その施設に入って、まず最初にバツと度肝のを抜かれたのはですね。福助さんがいたのです。仮分数といったのですね、あの頭囲1メートル。それはこの頭の髄液が普通は脊椎を通して流れるところが詰まっているために、頭圧がぶうっとふくられて頭の周囲が1メートルという子どもがいるの見て「わぁー」。生まれて始めてみました。なかなかちょっと気持ちが悪いというのが率直なところですね。

そしたら、その施設を案内してくれた人が「この子はうちの施設で一番軽い子です。」と言われました。また「あ〜」とビックリした。中入ってですね、50人ぐらいの入所している人たちを見て、すごい確かに「この人が一番軽い」と言われたのが分かったような気がしたのは、こうやってよだれたらして動けなくてしゃべれない奇声を発しているという、そういう人たちが50人ずらっといる状況を見ました。

昨日できなかったことで、今日できるように

当時22才の障害者問題は全く真面目に考えたことないという幼気な少年、浅野史郎は「えっ、この人たちは一体何のために生きているのだろうか」というような疑問がですね。私の中に起きてきたのですね。

その施設の職員の方が「あなた方、この子供たち何もできないと思っているでしょう。何も進歩がないと思っているでしょう。そんなことはないのです。昨日できなかったことで今日できるようになったことがあるのです。そして今日できないこと明日できるようにということで私たち職員は頑張っているのです。」というような話をされて、それもまたね心に残ったのですね。

1ヶ月の研修が終わってレポートを書かされました。その研修中に感じた何でも良いのですけれども、それについて書くと。私はこのことを書きました。「その施設の職員がその子供たちに進歩がないと思うかも知れないけれどもそうではない。進歩はあるんだ」というのが耳に残っていて、さっきの「この子供たちは何のために生きているのだろうか」ということに対する答えのなんかヒントみたいなものがそこにあったような気がする。そこで終わっているわけですね。私の1970年、今から34年前のレポートはそこで終わっています。

それにだんだん答えらしいものが出てきた。それまでそこから15年とか、20年という月日が流れるのでございますね。皆さんこれが。

北海道へ旅立つ

経歴にもありましたように今度は1985年ですね。昭和でいうと昭和60年。私は北海道へと旅立って行くのであります。講談みたいですけど。その頃浅野史郎はもう少年ではありません。当然です。おん年37才、37才の子持ちの中年になりかかった浅野史郎は厚生省から北海道庁福祉課長という名称ですから、実態は障害福祉課長ですね。

生まれて初めて障害福祉の仕事のプロとしてやるという仕事をするために青函連絡船に、あるとき飛行機だった。北海道に渡りました。そこでまた重症児、さっきの重症心身障害児に出会ったわけですね。仕事として。

1985年の4月に北海道に行って、北海道庁で仕事を始めて5月か6月ぐらいにですね、全国重症心身障害児施設施設長会議が札幌市で開催されて、その担当の部署ですからいろいろやりました。私のところの課長補佐と係長に「この仕事をするに際して重症心身障害児を見たことがない。知らないというのでは困ったもんだ。施設に行ってみて来い。」と言ったら、その二人は行って来たのです。泣き泣き帰って来ました。泣き泣きというか。「どうだった。」「気持ちが悪かったです。課長。その日飯が食べなかった。」「そうだろう」と。そこから仕事が始まる。1970年に私はそういう経験をしていますからね。

障害福祉課の職員であっても重症心身障害児というのを見たことがないとかですね。知らないというのがたくさんあった。それは仕方がないことなのですよ。それはともかく、そこで私はまた重症心身障害児というのに出会ったわけですね。

3度目の出会い

3度目の出会い。それからまた2年後です。1987年の9月28日には、私はまた厚生省に戻ってまいります。戻って来たのは実は4月ぐらいに戻ってきて何ヶ月かぶらぶらしていたのですが「ぶらぶらしていても給料をもらえるところなのか厚生省は」と言われますけども。いや一応早い話が、ということです。

そこで、実は私が本省というところでの最初の課長ポストが障害福祉課長だったのですね。その内示を受けたときには、神様がいるんじゃないかと思いました。障害福祉課長になりたかったんです。途中ちょっと省きますけれど。また戻りますけれど。北海道での障害福祉の仕事2年間で、この仕事はどうも手応えがある。おもしろいとふうに思ったこともあって、厚生省に戻って最初の課長ポストが障害福祉課長ということに非常に私は興奮を覚えたのですね。

そしてまた重症心身障害児に会いました。また仕事として。今度は国の課長ポストですから、日本の国の重症心身障害児の仕事は俺が握っているんだぐらいの緊張感と自負というのがありました。

その頃になると、さっきの22才の浅野史郎少年の心に芽生えた疑問には答えははっきり出ていました。

貢献重視主義人間観

なぜ、あの22才の頃に最初に出会った場面でこの子たちは生きている意味があるのだろうかという疑問を感じたかという、まあ少し難しく言うとな、そこには抜きがたく貢献重視主義人間観というものがあったのですね。漢字ばかりですね。貢献重視主義人間観。

「貢献」というのは世の中に貢献する。コントリビューションですね。貢献を重視する人間観、つまり人間の価値というのは社会に対して何かを貢献できるかどうかということで「あの人は偉い、この人は偉くない」とふうに、偉いか偉くないかというは別として、人間の価値の尺度として社会への貢献ということをやっぱり中心にして考える。貢献重視主義人間観、私、勝手に作った、これ名称ですよ。それが抜きがたくあったんだよ。やっぱり22才まで。それはね、やはりたぶん、私たちが歩んできた教育とか、そういう社会の要請みたいなものがあったと思います。

団塊の世代

それは程度の差こそあれ、みんな同じですけれども、私は昭和23年生まれということは戦後なんですね。まだ戦後というのが色濃く残っている時。日本は貧しいと。しかも私は団塊の世代です。昭和22年、23年生まれというのは一番多いですから、人間として。

子どもの頃から先生に言われました。戦後の貧しさもあって、日本には何にも資源がないんだよ。石油も取れない、鉄も取れない、何もない。あるのは人間だけだということと、君たちは団塊の世代なんだよ。人が多いんだよ。高校受験だって、受験勉強、受験戦争大変だ。大学受験になってもっと大変。就職も大変だよ。結婚だって大変だよ。はい先生。結婚は別に同じ年同士で結婚すれば何も問題ないんじゃないでしょうかと賢い浅野史郎少年はそういいましたけども、なんとなく子ども頃から人が多い。「競争、競争」というのが私たちの中に刷り込み現象ですね。プリティンク、刷り込み現象としてある。だから、何

か人よりも優れなければいけないと。貧しいの日本のために資源が人間しかないのだから頑張らなくちゃいけない。頑張りズムみたいな。そして人間の価値も頑張ったものとか、そういう意味でのお勉強のできる人とかいうのが優れている。

障害福祉とは何だろう？

そこからいったら重症心身障害児という人はいる場所がないんだね。どう考えてもですよ。社会に貢献するような存在にはなりそうもないよね。重症心身障害児という人は。だから「この子たちは何のために生まれてきたのだろうか。」ということになるのです。しかし、それまで私も北海道庁で、障害福祉の仕事をして来ながら、「そうじゃない」と思いたかったというか、思いたかったことがやっぱりあるのです。つまり自分のやっている障害福祉とはいったい何なのだろう。給料をもらって、その人たちの幸せのための仕事をしている。じゃあその人たちの幸せって何なのだろうかということをおある程度突き詰めて考えると「重症心身障害児という人を社会の中心におく」ということになるのだよね。どうも。

そうすると、なんと言ったらいいかね。「人間は何のために生きているか」みたいなことを言うと、実はね、それはさっき一番最初、冒頭で言ったあの重症心身障害児施設の職員の人が出た。「昨日できなかったことが今日できるようになる。今日できなかったことが明日できるようにするために我々は関わっている」。これです。我々は進歩をするために生きているのだね。どうも。進歩ですから。

それはどこまでということはないんだね。ベクトルの方向というか、矢印の方向が大事なのです。矢印の高さではないんだね。という生きるということとは皆さんそういうことではないでしょうか。多分。また生きているという実感というのは、そういうことではないでしょうか。

脱デブ宣言

なんか何でも良いですよ。何でも良いのだけれど、私も17年前はデブでした。ここに来ている人、誰も知らないでしょう。私デブだったのです。そもそも走ったのはデブやめようと。脱デブ宣言を自分なりに発したのですよ。

「あその県知事もちょっと真似させたい」と思うものがありますよね。この近所にも。私は自分で17年前に「脱デブ宣言」というのを発したのです。そのためにいろんな事があったんだが、やっぱり走るのが良いんじゃないかと。

最初は500mやってみました。そのうち1km走れるようになった。時間でいうと2分しか走れなかったのが、3分、5分、進歩ですよ。うれしかったね。「生きている」という実感です。別にオリンピックに出られるとは、しかとも思っていませんでした。だけど幸せすね。それは別に何でも皆さんだって趣味の世界、仕事でもできなかったことができるようにということ。突き詰めていくとそのために生きているじゃないですか。だとすれば重症心身障害児と言われる人も生きているのですよ。まさに。

ただ漫然と生きているのじゃない。生きている。必死に生きているのですね。進歩を目指している。だから昨日できなかったが今日できるようにするために生きているのです。全国重症心身障害児親の会との出会い

障害福祉課長になってですね。全国重症心身障害児親の会、北浦雅子さんという方に出会いました。障害福祉課長のときはたくさんの出会いがありましたね。あの頃の出会いが密度が非常に濃かった。しょっちゅうあってたし、なんか教えられるものがすごく密度が濃かった。

その北浦雅子さんのお子さん、ひさ坊、ひさしさん。私と同じぐらいの年なんだけれど、ひさ坊と言っていました。「浅野さん、浅野さん、ひさ坊がね、水を飲めるになった。」「水飲めるようになった。何でそれが」。ひさ坊は実は種痘脳炎なんですね。種痘をしてくださって、高熱を発して、そこから脳炎になったのです。そこから重症心身障害児になって、いわゆる寝たきりですね。

その北浦さんの息子さんが、最初、水を綿に浸したやつしか飲めなかった。それが施設に入って職員の方々の手助けを得ながらストローで飲めるようになった。あとはこうやって飲めるようになったのですよ。それですごく喜んでたのですね。北浦さんは。そのお母さんのまさこさんは。息子さんもうれしかったと思います。言葉にはできないけれど。それが進歩ですね。なるほどとふうに思いました。

「教育」とは何だろうか？

そこからいろんなことを考えたのですね。「教育」とは何だろうか。昨日もね、その180人の高校生に「君、教育の定義はなんだと思う」と。私の最初期待していた答えは「教育というのはその人を鍛え上げて社会のために役に立つ存在にすることを教育というのだと思います。」という答えだとその後話しやすいんだよ。すごく。賢いんだよ。彼ら。言わないんだ。なんか立派なことを言うのですよ。ちゃんと私が「そうだろう」と言うようなことを先回りして。あんまり賢いっていうのも可愛くないね、これ。

実はそういう答えを期待していたのです。多分、多くの人たち、「教育者」と自分が思っている人も「教育」の定義はこの人たち、子供たちを鍛え社会のために役に立つ存在にしてあげるといふ行為、それを教育というふうに答えると思います。だけどその定義だと、私の可愛い重症心身障害児は「教育」というのは役に立たないことになる。「教育」というのは馴染まないんだね。重症心身障害児に。だって、この子供たちを鍛えて世の中の役に立つ存在にするというのは空しいじゃないですか。そうするとですね。多分これは「教育」というその人の定義が間違っているのであります。

重症心身障害児中心の教育

逆に重症心身障害児を社会の中心にすると教育の定義が変わってくるのですね。「教育」というのは、その人の能力を最大限に引き出す所業のことをいうというように再定義することができますね。「その人の持っている能力を最大限に引き出す作業」エデュケイトというのは引き出すというのが原語らしいですね。嘘かもしれないから人に言わないようお願いしますが、どちらでも。引き出す。そうするとですね。まさに重症心身障害児こそ「水が飲めるようにする」。昨日まで水が飲めなかったら飲めるようにする。これ教育です。まさに「教育」というのは重症心身障害児にこそ最も必要とされるかも知れません。最もというね、昨日もちゃんとこれを言ったら「そういうことなんですか。先生」とふうにその高校生が聞くわけですね。「そういうわけでないんだ。」と言ったので

すけれども。

その重症心身障害児に「最も」とは言いません。同じことなのです。どこまで高みに行くか。ではなくてこっちに向けさせるという行為が教育です。だとすれば実はですよ。そうやって教育を最低にすると、多くの子供たちは救われるのです。別に重症心身障害児でなくても、今、40人学級とっています。我々の時は60人学級。先生はですね60人もいるだから、中には「お客様」という人もいますのですよ。もう全然、学校の勉強について来られない。なじめない。給食時間と休み時間だけに情熱を傾けるといふ子どもがいるのですね。先生はもうそういう子は相手にしていないのです。もう60人もいるから相手にできない。

だから「お願い。邪魔だけはしないで。」という感じでその子どもを眼中に入れずに前の方の5～6人だけ相手にする。出来の良い。考えてみると、その出来の良い前の方の子はですね。先生にあんまり期待していないんだ。塾に行ったりしているしね。塾に行ったりする勉強の疲れを癒すために学校に来ているかも知れない。「先生、お願いだから僕たちの癒しの邪魔にだけしないでくれ」と子供たち思っているかも知れない。だからそっちには本当はいらないのね。どっちかいうと。後ろの方の人こそ、本当は教育というのは価値がある。そうすると実は「教育」というのは欲でないかな。そうすると何がここで起きているかという、重症心身障害児という問題から、それを社会の中心に置くということからですね。別に重症心身障害児といわれる人たちが幸せになるだけでなく、社会全般が幸せになるという、こういう構図ができあがるのですね。

そんなところに賢い私が気がついたのですよ。よけいなことでした。一生懸命仕事をしていた私は本当に気がついて、これだと。障害福祉の仕事はですね「哀れでかわいそうな障害を持っている人たちに何か良いことをやって上げると言うことで完結するような仕事ではない。社会の有り様を変える、世直した。そうすると自分は国士だ。今の子供たちに「国士だ」と言っても分からないですね。と言いながら、笑っているけれども分からない。国士と国を支える。国士の「士」というのは「さむらい」と書くのですね。国士という自負も感じました。それは、厚生省の障害福祉課長になってからの話なのです。

小山内美智子さんとの出会い

時間をちょっと戻します。北海道庁で昭和60年から課長をやった。初めて障害福祉の仕事のプロとしてやったのです。何も分からなかったのです、私。何も分からなかったので、そうだ行く時にですね。親切な先輩が忠告をしてくれました。「浅野君、北海道に行ったら小山内美智子という女性の障害者がいるから。これは気をつけろよ。」と言われましてね。どういう意味ですかと言ったら、脳性麻痺の女性なんですけど生意気でな。これ。すぐ道庁とか札幌市役所へ行って「あれしろ、これしろ」と言って動かなんだから。気をつけろよと。あっ、そうですかと。小山内美智子という名前は北海道での障害者、ただ一人知って北海道に行ったのです。4月に行って初めて小山内美智子さんに会ったのは6月です。実はその前、5月に彼女は子供を産んでいました。大地君、実はうちの2番目の娘とほぼ同じ年ですね。どっちもうまくいかなかったら結婚させるかなんて言っているんですけど。これはもっと後の話ですが。

小山内美智子さんの本は介護の教科書

小山内美智子さんはたくさん本を書いています。10冊ぐらい書いています。「あなたは私の手になれますか」。これは介護を学ぶ人たちに対して教科書として書いたものです。

「セックス」ということを中心に書いた本もあります。障害者にとっての人権の究極のものはセックスだと彼女は強い思いがあります。いろんな権利を保障するという中で、セックスというのは最後までタブーだ。それを打ち破らなければなければ本当に障害者にとっての自由が獲得できないという彼女の心の叫びなのですね。この本の中に彼女が書いています。「私は生まれてから40年間、自分で自分の性器をさわったことはありません。」と書いてあります。手が動かないからです。脳性麻痺で。その自分で自分の性器をさわったことがないという小山内さんが、何度も恋愛し、失恋をし、しかし結婚をして子供を産みました。それが大地君ですね。その1ヶ月後、彼女に6月にあったのです。

その「小山内美智子に気をつける」という本物が来たけど、会ったらすごく面白い子なのね。僕よりも若いですけども、非常にはっきりしていて理論的でユーモアのある方、また文章もとてもうまい。すぐ意気投合をして。私は障害福祉について本当に何も知らなかったもので、その面での先生になりました。それが生涯の友になってここまで至っているのですが、それが北海道での最初の出会いです。

彼女もお尻を拭いてもらっていたのですね。ずっと。彼女は今、ウォッシュレットというものができたのですごく喜んでいて。やっと人の手を借りないで排便ができるようになった。それまでは毎回人の手を煩わせるのです。「私はそういうことについてはプロだ。」と言っていた。だから、そのお尻を拭いてもらう手つきでその人の性格までわかっちゃうというようなことを言っています。そういう出会いがありました。

もう一つの出会い

もう一つの出会いというのは知的障害者なのです。知的障害者のことも何も知らないで北海道に行きました。だんだんわかってきたのは北海道で生まれる知的障害者の人生が分かっていたのですね。ある程度定型化されたものとしてはですよ。

北海道で知的障害をもって生まれても親御さんわかりません。その頃は早期発見のシステムがありませんでしたから。どうも1歳、2歳で少し言葉が遅いな、おかしいなと思っ
ていてもわからないで過ごします。わかるのは小学校へ入る頃ですね。検診を受けて、この子はおかしいです。

入所施設に最大の関心

この子は精薄ですと当時は言っていました。いまは知的障害者と言っていますが、当時は精神薄弱児、略して精薄、だから家の前の学校へ行けないの。だから養護学校へ行きましょう。北海道の場合、あれだけ土地の広いところで養護学校は二十数校しかないのです。ということですよ。養護学校は通えるところにはない。バスですら通えない所に養護学校があるとすると6才の知的障害というハンディを持った子供が寄宿舍に入れられるのです。どう思います。そして中学校3年ぐらいになると親御さんは非常に心配になって来ます。養護学校を出た後に行く所がない。だからその親御さんが思うのは何とか施設に入れたい。施設に入れこむとホッとするんですね。ああこれで安心した。それは北海道の親御

さんに限らずですけれども「親亡き後」ということが何度も繰り返される。「親亡き後」。自分が若くて元気で生きているときは良いけれど、自分たち親が死んだらこの子たちはどうなるのか。それは当然の心配です。心配で心配でならない。そういうときに考えられるの施設しかないのです。なかったのです。当時は。だとすると入所施設に入ってもらおうというのが最大の関心事です。

北海道庁で障害福祉課長をやっている時にいろんな要請があつてですね。親御さんの団体からも「課長、施設を造って下さい。親でお金をいっぱい集めるから、この施設を認可して下さい」とかね。それから町長さん方からもずいぶんありました。「精薄の施設つくってけろ。」というふうに。これは別の意味があるのですね。北海道の場合。「うちの町には他に産業といえるものが何にもないんですが。福祉施設だけ。だからここで精神薄弱者の施設つくると雇用だけでも何十人と生まれるし食料品も町から買ってもらえるし。要するに一大産業なんだ。」と。過疎の町にはこれしかないからと町長さんがワンサと来るのですよ。

北海道で生まれた施設に入った障害者はだいたいの場合もう出られません。入ったきりです。本人たちやっと言葉が言えるようになった障害者がいるわけですが、その人たちが自分たちのそういう境遇を称して「無期懲役」。「自分で選べない」というような人生をおくったら親御さんが安心するというそういうために自分は給料をもらって仕事をしているのだろうか。やっぱり単純に考えると非常に疑問に思えました。何なのだろうと。

Yさんとの出会い

北海道で知的障害者の社会自立セミナーというのが開催されました。私も担当課長でその打合会に出てたのですが、そこに北海道から古くから施設をやっている施設長さんもいました。その打ち合わせの最初の時にその施設長さん、Yさんというのですが、Yさんが「ところで障害者の社会自立って何だ。知的障害者の社会自立っていったいあるのか。自分の字も、自分の名前も書けない。簡単な足し算引き算もできない。そういう子どもを社会に出す。そんなことできない。おおかみの群れの中に子羊を出すようなものだ。」

実はそういったことをそこで言って「えっ」と僕も思ったのです。

～次号へ続く～

第12回はくい福祉まつり

2004年10月17日(日)

10月17日(日)に毎年恒例の「はくい福祉まつり」が石川県羽咋体育館を中心に開かれました。当日は曇りがちで肌寒さを感じさせる日でした。羽咋市の福祉団体、福祉施設による施設紹介や作品展示即売が行われ、焼きそば・うどん・フランクフルト・ビールなどの飲食コーナーのテントが立ち並んでいました。

今回の「はくい福祉まつり」に参加して、もっとも印象に残ったのは、ステージコーナー最後のフォークグループ「でえげっさあ」の演奏でした。(詳しくは次ページを参照)自分たちで地元白峰など地域の様子を作詞・作曲をしたものでした。何故か23年前、同じ体育館・同じ時期に開かれた「羽咋わたぼうしコンサート」を思い浮かべながら聞いていました。



食を求めてテントめぐり



体育館の中で
「お客さん来ないかな」



可愛いクマさん、
羽咋体育館に出没



秋晴れだ、日光浴だ。
ウソ、寒い日だっただろう

－われら仲間たち－

フォークグループ・「でえげっさあ」

白山市・川崎 正美（小学校教員）

「フォークソングは才能のない人のための音楽だ」

10年あまり前、に出会った言葉です。この言葉を教えてくれたのはフォークシンガーの笠木透さんです。彼は日本のフォークソングの草分け的存在で、流行に流されることなく、フォークソングの本流を歩み続けてきた人です。「まずは表現してみよう。そこから始まるのだよ」「人と人をつなぐ。その間に歌があるのだよ」とも教えられました。

この言葉に共鳴した音楽好きが集まって誕生したのがフォークグループ「でえげっさあ」です。1995年の秋でした。「でえげっさあ」とは白山ろくの方言で「どういうことだそれは!？」という意味です。「社会にもの申して行こう」という意志が込められています。メンバーは学校の教員3人と病院の薬剤師、それに後から加わった紅一点の幼稚園教員の合わせて5人です。

才能がないわけですから、オリジナリティーだけが売りです。プロの人たちがけっして歌うことのない、石川の自然や働く人、文化、農業などを主なテーマに毎年十数曲の歌を作り、オリジナルは140曲あまりとなりました。それらを携えて、金沢や加賀で年に30回程度のコンサートをさせてもらっています。先日の「はくい福祉まつり」は久しぶりの能登出張でした。呼びいただき本当にありがとうございました。

「でえげっさあ」の演奏風景 また、他の人たちとの活動にも取り組んでいます。どういうわけか家族や友人に障害者が多く、彼らと一緒に歌づくりやコンサート活動もしています。そのうちの一人ナベちゃん」は東京在住で筋ジストロフィーです。ボランティアに車いすを押しもらいながら石川にやってきます。もう一人は我が息子、先天性の水頭症の小学二年生です。苦手なことが多いのですが、音楽だけは大好きで、三本弦の楽器ストラムスティックを弾き、ドラムをたたきます。それに精神障害者の「よっちゃん」を加えた三人と「でえげっさあ」で年に一、二度コンサートをしています。お世辞にもうまいと言えない演奏ですが、そんなことは問題外。きいた人はみな、障害を持った彼らの表現に元気づけられるのです。最近ではあちこちからお座敷がかかるようにもなりました。

その他、小松の保育士のみなさんと「フォークソングセミナー」を開催し、歌づくりの学習をしたり創造したりしています。その発表会も先日行いました。「人と人をつなぐ。その間に歌がある」本当にそうだなあと実感する昨今です。みなさんもぜひ歌づくりやってみませんか？



読者企画・食べ物談話

水の不思議（1）

金沢市・秋本 信子
(管理栄養士)

私たち人間の体は、ほぼ60%が水だそうです。残りの15～18%がたんぱく質、脂肪はほぼ15%、骨のカルシウムを含むミネラルと燃料となる糖質貯蔵物質のグリコーゲンを足してほぼ7%。つまり水こそが、人体の構成に不可欠で最も重要なものなのです。

ちなみに幼児の体は70～80%が水、高齢になると水の割合がほぼ50%、肥満では50%以下になるそうですから、飲み水を多めに飲むことを心がけましょう。肥満がなぜ、多くの病気を呼び込んでしまうのか、さまざまな視点で研究がなされていますが、鍵となるのは人体の構成に占める水の割合なのです。体を守っている免疫力（自然治癒力）は、水の割合が少ないと十分に働いてくれません。その意味でも、もっと水に関心を寄せてほしいと思います。

ところで、一日に摂取する水の量は、食事に含まれる水とコーヒーなどの飲み物、体の中で生じる水（代謝水）などで約2,300ミリリットルです。そして体から排せつしている水の量は、尿・便・汗と皮膚からの蒸散（不感蒸泄）などで約2,300ミリリットルとされています。うまく出し入れのバランスが取れているはずなのですが、甘いお菓子や塩辛い食べ物などを食べ過ぎると喉が渇き、いつもより多量の水が欲しくなって体がだるくなります。現代はこのような悪循環になっている方が多いですね。

支援費制度が実施されて2年目

七尾市・脳性麻痺

地域移住とかグループホームという、変わりつつある制度と施設と利用者の問題点。重度の障害者で24時間、介護が必要な人が、自立していく上で一番困難にぶつかることは、介護者の確保の問題ではないだろうか。親や家族の反対があるのは、そのことであろう。施設のように国や県や行政が派遣してくれるのなら、家や施設を出て自立生活が可能だと思う。現状制度では難しいと思う。介護の手がなれば、生きていけないし、20年

30年続いている施設生活の中において、与えられたプログラムの枠で、生活してきた者にとって、自分でプログラムなど考え、主張していくエネルギーや体力 勇気と自信が必要だし、難しいと思える。何時に起きて、何時にご飯食べるとか、何をどうして欲しいとか、言えなければ、ヘルパーさんが動けない。施設のように何も言えなくっても、職員が勝手にやってくれるというのでは、自立心がつけられないし、自分の生活パターンが見えてこないと思います。

施設や家から出たいと言うのであれば、日ごろ、施設や在宅の生活の中で、可能な限り自分のプログラムを作り、生活をしていくことが大切なのではないだろうか。

マイブックスルーム

みじかい命を抱きしめて

ロリー・ヘギ著

発行所：フジテレビ出版 定価：1,400円＋税

著者（早期老化症アシュリーちゃんの母親）の本文からの引用をもって推薦文にかえたいと思います。「早期老化症（プロジェリア）という病気を解明することは、人の老化を解明することだとよく言われます。プロジェリアは神様が遣わせた病気だという人もいます。ただ、私にはこう思えてならないのです。短い人生を一生懸命生きることの大切さを教えたい。そして自らの死や生きる目的を考えてほしい。そうお望みになった神様が送り込んでくれた天使、それがアシュリーなのだ。人に与えられて時間には限りがあります。アシュリーは残された時間を信じられないほど積極的に楽しく生きています。彼女の存在自体が語っています。」著者はアシュリーちゃんによって見方が変えられたよりも神様を知ったことで見方が変わっていったと言います。(H.N)

川柳裏表紙

飼い犬の 鎖の長さに ある自由

五、七、五の川柳のリズムからはずれた、いわゆる「中八（なかはち）」の句ですが、好きな句として私の句集に載せてあります。たしか氷見川柳会の「くじら」に発表した句だった。

どこへでも自由に行ける野良犬が繋がれている鎖の長さだけしか動けない、飼い犬の不自由さを嗤った（わらった）一句である。食べ物はもらえるが、行動範囲が実にせまい飼い犬ヨ（比）

編集後記

あけましておめでとうございます。昨年は台風・地震などの自然災害、幼い子どもたちの命が奪われる事件が多い年だったと思います。

さて、宮城県知事・浅野史郎さんによる「脱施設の政策と実践」という講演を昨年8月に富山へ行って聞いてきました。

「施設から地域へ」と叫ばれているこの頃にといい、自立生活支援センター富山のご協力により数号にわたり掲載させていただきます。お読みになった皆様のご感想をお待ちしております。(Z.O)